「本人・家族とともに歩むケアマネジメントについて
～ケアマネジメント協働者ピアグループワークの取り組みから～」

日本ケアマネジメント学会第 14 回研究大会口演要旨

2015 年 6 月 14 日 SUN

パシフィコ横浜会議センター

富山総合福祉研究所
所長　塚　本　　聡

富山総合福祉研究所の塚本と申します。独立開業の居宅介護支援事業所のケアマネジャーです。本日は、「本人・家族とともに歩むケアマネジメントについて　～ケアマネジメント協働者ピアグループワークの取り組みから～」と題してお話をさせていただきます。

実は、全く同じタイトルで 6 年前のこの学会、場所ももしかしたらこの会場だったかもしれませんが、ピアグループワークについてお話をさせていただきました。それから今日までの間、細々とながらこのピアグループワークの取り組みを継続して参りました。本日は、これまでの各回の要約記録を読み返し、当初の目的が達成されているかどうかを確認するという趣旨です。結論から申してしまいますと、抄録の最後に記しましたとおり、確認した結果、当初の目的、そこに記した 3 つの目的ですが、概ね達成されているという結論になりました。

本日は、この抄録をそのまま読み上げて、いまお話した結論を述べて、最後に「この取り組みはとても良い取り組みなので皆様も是非やってみてください」と締めくくって、「やれやれ、やっと無事に発表が終わった」と言ってとっとと帰る算段をしておりました。
ところが、そうはいかなくなって、もう一つお話しなければならないことができてしまいました。

どういうことかと言いますと、このピアグループワークの場で、参加されていたある方から、「困った事があって担当の相談員のところに相談に行ったのに、全く相手にされず、人間として扱われなかったのがつらかった」と語られたことがあったのですが、それを聞いた他の参加者の方々から、「自分も同じような経験がある」というご発言が相次ぎ、一種異様な盛り上がりを示すこととなったのです。当方は、その回のつどいの折にこの学会の事をお話したのですが、お話と言っても、抄録原稿の原案を参加者の皆様にお示しして、このような内容で口演を行っても良いかお諮りするのと、個別のプライバシー情報についてどこまでの内容を話しても良いか確認をさせていただくつもりで学会のことをお話したのです。

しかし、この学会が、相談援助の専門職やその専門職を育てる立場の大学の教員などが

全国から集まってくる学会であることから、参加者の方々から、その日のつどいで明らかになった「相談援助の専門職が話を聴いてくれないので本人・家族が傷ついている」ということを、本人・家族に代わってあなたが訴えてきてほしいと言われたのです。

この投げかけをどう受け止めるべきか、わたしなりに考えてみました。はじめは、要約記録を読み直してさらりとまとめる予定だったのですが、もう少し深く掘り下げ、そもそもなぜこの取り組みを始めたのか、原点にまで立ち返って確認することにしました。

わたしたちは、ケアマネジメントはひとりケアマネジャーだけで行うものではなく、サービスの利用者・家族もケアマネジメントの客体ではなく主体であり、ケアマネジャーと利用者・家族がともに歩むなかで一つのケアマネジメントが完成するという考えを持っていて、そういう価値観を広めていきたいと考えていました。また、ケアマネジメントは、ＡさんＢさんの個々の問題が解決して良かったねで終わるのではなく、最終的にはその地域の、人としての尊厳が大切にされる地域づくりにまで責任を負うもの、そこまでがケアマネジメントの守備範囲という考えを持っていて、そういう価値観を広めていきたいとも考えていました。ピアグループワークはそのための取り組みであり、わたしたちが「ともに歩む」とか「協働者」という言葉を用いるときにはそういう意味を込めていました。

そのような志で、細々とながらもピアグループワークを毎回積み重ねてきて、ここにきてその参加者の方々から、「自分たちの声を学会の人たちに届けてほしい」という投げかけが生まれるところまできた。このことは、それ自体がこのピアグループワークの目的が正に達成されていることの証明と言えるのではないかと気づきました。学会でいまお話していることは、当初の抄録の内容とは全く別物なのではなく、むしろその延長線上にあるもので、「対話は生き物」と当方は良く言うのですが、まさに生きて変容を続けているそのままの姿を表現することになるのだと考えました。それと、ピアグループワークに参加された皆様の声は、主催者の一人である当方が代弁する責任を負わなければならないとも考えました。そのような事情で、抄録どおりの内容ではなく、このような形のお話をさせていただいた次第です。

果たして、代弁者としての役割を十分果たせているのか自分でも心許ないのですが、繰り返しになりますが、ご本人・ご家族は、相談援助の専門職が自分たちの話を聴いてくれない、一個の人間として扱ってくれないという事に深く傷ついています。「私たちの話を聴いてください」と訴えています。ここにお集まりの皆様は、自分はそんなことをしていない、きちんと話を聴いているぞと言われるかもしれません。しかし、「自分は大丈夫」と思うところに油断が生じるというのもまた半面の真理です。皆様がお帰りになられて、相談援助の場に立たれるとき、そう言えば塚本が妙なことを言っていたなと思い出して、「いま自分の目の前にいる人間の話をわたしは本当に聴いているだろうか」と振り返るきっかけにしていただければ、こうやって拙いお話でもした甲斐があるというか、役立てていただけるならばうれしいです

本来であれば述べなければならなかったことで、漏れてしまったことがたくさんあると

思います。時間の制約がありますので、そういった事については質疑応答の時間の一部を利用してお話をさせていただくことができましたら幸いです。ご清聴ありがとうございました。

（補注）文中にある「３つの目的」は、以下のとおりです。

・「ともに歩むケアマネジメント」についてみんなで考える。
・ともに歩む者として、立場を超えてきずなを深める。
・対話の中から自分に必要なものを見つけ、問題解決の知恵とパワーをもらう。

※この文章は、あらかじめ読み上げるために作成した文章ではなく、口演が終わった後で自分の記憶をたよりに書き起こしたものです。内容に誤りがあるようでしたら当方に教えていただけるとうれしいです。